

遊戯王ARC-V パラレル・シンクロン

ししゅう

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

シンクロ次元（？）からやってきた少年のお話。

目

次

第0話
第一講
第二講

20 3 1

第0話

「モンスターで、ダイレクトアタック！」

相手モンスターが生み出した衝撃波が迫る。Aカードを探そうとするが長期戦でフィールド内のAカードはほぼ使い尽くされてしまっていることを思い出した。

「くつ、うおおおおおおおおおおおお!!」

結局モンスターからの攻撃から逃げられず、悲鳴とも雄叫びともつかない叫び声をあげる。最後のLPを削り取られて俺は膝をついた。

『決まつたーー！舞綱チャンピオンシップ・ユース選手権！優勝は若干14才！赤馬零児選手だアアア!!』

ファンファーレと歓声が鳴り響く。悔しさが溢れ出して一度だけ地面を殴りつけた。

「未来

「！」

名前を呼ばれて顔を上げると”W i n n e r : R e i j i ”と表示された掲示板をバックに大会の優勝者が歩み寄ってくる。その姿はあまりにも様になつていて思わず苦笑してしまった。

「いいデュエルだつた」

「零児・・・」

『惜しくも敗れました、同じく14才、十六夜未来選手にも拍手を！』

差し出された手を掴んで立ち上がると歓声が一層大きくなつた。・・・まあ、悪い気分じやない。

「結局チャンピオンシップでは一度もお前に勝てなかつたな・・・」

「ふつ、だが危ない所だつたよ。《光の召集》・・・後1ターン遅ければ優勝は君だつた」

確かにこのターンを凌ぎ切り、墓地に眠る切り札を回収できていれば・・・だが零児はそれをさせなかつた。

「よしてくれよ・・・でも、おめでとう零児。この調子なら来年には最年少のプロ誕生か」

「どうかな・・・そういう君はどうする。来年も出場してプロを目指す

か？」

聞かれて少し悩む。零児の背中を追いかけるのも悪くないけど……

「そうだなあ、俺は……人にデュエルを教えたい」

「教える」

「ああ、舞網市のレベルはまだまだ低すぎると思うんだ。」

ずっと物足りないと思っていた。この街にやつて来た当初は様々

な召喚法に驚かされたがそれも最初だけで、大好きなはずのデュエルが退屈に感じていた。零児と初めてデュエルするまでは……

「なるほど、確かに……このままでは……」

零児もうすうすそれは感じていたのだろうか、思案顔になる。

「零児？」

「いや、君の言うことはもつともだと思っていた」

「そうか？でもそれだけじゃない、もつと大切なことを……きつとい

い決闘者を育ててみせるよ！お前に勝てるぐらいの奴を、な」

目の前のライバルに不敵な笑みを浮かべてやると、少し驚いた顔をされた。

「面白い、楽しみにしていよう……！」

「ああ！」

俺たちは固い握手を交わし、互いを称えあつた。

これが2年前、俺、十六夜未来と親友・赤馬零児が最後にしたデュエル。

第一講

月日は流れ、俺、十六夜未来は16才。一年前からデュエルスクール「遊勝塾」で塾講師のバイトをしている。採用試験の際やはり年を聞かれたが、その年の舞網チャンピオンシップユース選手権で優勝したことを告げた途端、「是非!!」と塾長に逆にスカウトされる形になりました。採用となつた。

「よし、今日の講義はは様々な“召喚方法”についてだ。デュエルモンスターZにはどんな召喚法がある?」

ここは遊勝塾の小さな教室。俺は部屋を薄暗くしてプロジェクトターを操作しながら授業を始める。

「はい!はーい!えーっと、通常召喚と特殊召喚だろ?あつ!あと反転召喚!」

「融合召喚とS 召喚、X 召喚があるわ!」

「フツシ、アユ!儀式召喚とアドバンス召喚を忘れちゃだめだよ!」

年少組のフツシ、アユ、タツヤが真っ先に答えてくれた。
「そうだな。そして最後にもうひとつ……」

「〔〔〔〔P 召喚!!〕〕〕〕」

・・・今度は遊矢の声も混ざつて聞こえた。

榊遊矢。^{さかきゆうや}時のエンタメ決闘者・榊遊勝の息子であり、^{さかきゆうしきょう}P 召喚のバイオニア。先日、ストロング石島とのエキシビジョンマッチにて突如新たな召喚法を発現させ、見事勝利してみせた。現在彼の注目度はうなぎのぼりだ。

「もう、遊矢……」

そんな遊矢を半ばあきれた様子で諫めるのは遊矢の幼馴染、柊柚子だ。^{ゆず}いつもなら「子供かっ!」とハリセンを持ち出してツッコむぐらいのことはしそうだが、どうも最近元気がなさそうだ……心配だな。

「ははは、正解だ。さて、今いろんな召喚法が並んだが、モンスターの召喚は大きく”通常召喚”と”特殊召喚”の2種類に分けられ

る。儀式、融合、S、X、そしてPは全て“特殊召喚”なんだ。
ちなみに反転召喚は”表示形式の変更”扱いだ。”

プロジェクトを再び操作して“特殊召喚”的欄に次々と召喚法を表示させてゆく。

「一方で通常召喚には”攻撃表示で召喚”と”裏側守備表示でセット”の2つがある。みんな、モンスターをいきなり表側守備表示で召喚したりするなよ?」

そんなへマしないよー!

あはははは!

・・・いい雰囲気だ。さて、つぎの話に移ろうかな・・・と思つて
いたとき、

「はーい！せんせー、ちょっとといいでですかー？」

「どうした、素良。」

拳手したのは遊勝塾のニューフェイス、紫雲院素良しうんいんそらだ。融合デッキ【ファーニマル】の使い手、さらに子供離れしたデュエルの腕前を持つている。間違いなく舞綱の決闘者ではないだろう。そして恐らくは……

「やつぱりデュエルは講義じやなくて実践したほうがいいでしょ！だから未来、僕とデュエルしようよ！少なくとも融合召喚のお手本にはなれるとと思うからさつ！それに、君とは一度戦つてみたかつたからね……」

「……いいだろう。じゃあみんな、デュエル場に移動教室だ！デュエルのテーマは、そうだな……”特殊召喚の重要性について”といったところか」「「「「はーい！」」」

「二人とも！準備はいいかー！」
「はーい！」

「あ、はい。」

リアルソリッドビジョンの管制室からマイクで話しかけてきたのは塾長の柊修造さんだ。柚子の父親で、嘘か真か彼のいない日は遊勝塾付近の気温が2°C下がると言われるほどの熱血漢だ。

「よーし！いくぞつー！アクションフィールド、ON！フィールド魔法、《スウェイツ・アイランンド》！」

リアルソリッドビジョンが起動し、フィールドがその姿を変えてゆく。お菓子の家、キャンディの木、チョコレートの池といったお菓子づくりのめるへんな世界があらわれた。

—D u e l m o d e o n, s t a n d b y—

「いくよ未来！」

「ああ！」

これから行うのはアクションデュエルの儀式。気恥ずかしくて未だに慣れないがエンター^{デュエリスト}テイメントには必要不可欠のものだ。

「戦いの殿堂に集いし決闘者たちが！」

「モンスターと共に地を蹴り、宙を舞い、「

「フィールド内を駆け巡る！」

「見よ・・・これがデュエルの最強進化系！」

「アクション——！」

「デュエル！」

M i r a i L P 4 0 0 0 0 V S S o r a L P 4 0 0 0 0

「先攻は僕がもううよ！僕のターン！」

宣言すると同時に素良はデイスクリプトから5枚のカードを引き抜いた。

「僕は永続魔法《トイポット》を発動！さっそく効果を使うよ！1ターンに一度、手札を一枚捨てて、デッキからカードを1枚ドローして互いに確認する。そしてそのカードが「ファーニマル」モンスターなら手札にあるモンスターを特殊召喚できるよ！まあそれ以外のカードだったらそのまま墓地に送られちゃうけどね・・・ドロー！・・・よし！ドローした《ファーニマル・ドッグ》を特殊召喚だ！」

トイポットのレバーが動き出し、一つのボールが転がり出てくる。

ポン！と音を立てて弾けたその中から小さな翼を背中に生やした子犬のぬいぐるみが飛び出してきた。

『ファーニマル・ドツグ』が特殊召喚された時、効果発動！……同時に、手札から墓地に送られた『エツジインプ・チエーン』の効果も発動させる！このカードが場か手札から墓地に送られた時、デツキから『デストーイ』カードを手札に加える！『デストーイ・マーチ』を手札に！

『デストーイ・マーチ』

カウンター罠

①：自分フィールドの「デストーイ」モンスターを対象とするモンスターの効果・魔法・罠カードを相手が発動した時に発動できる。

その発動を無効にし破壊する。

その後、以下の効果を適用できる。

● 対象となつた「デストーイ」モンスター1体を墓地へ送り、レベル8以上の「デストーイ」融合モンスター1体を

融合召喚扱いとしてエクストラデッキから特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターは、次の自分エンドフェイズに除外される。

・・・『トイポツト』のコストは手札から墓地に送られた時に発動する効果を持つていたのか。しかし厄介なカードを握られてしまつたな、と警戒しつつ素良のブレイングに再び意識を向ける。

『ファーニマル・ドツグ』の効果でデツキから「ファーニマル」モンスター、『ファーニマル・シープ』を手札に加える！続いて手札の『ファーニマル・シープ』の効果発動！自分フィールドに『ファーニマル・シープ』以外の「ファーニマル」モンスターがいる場合、手札から特殊召喚できる！そして『ファーニマル・シープ』のさらなる効果！このカード以外の自分フィールドの「ファーニマル」モンスター1体を手札に戻すことで、自分の手札・墓地から「エツジインプ」モン

スター1体を特殊召喚する！よみがえれ！《エツジインプ・チエーン》！」

《ファーニマル・シープ》と《エツジインプ・チエーン》が素良のフィールドに並ぶ。コストで捨てられたモンスターの効果を活かしつつ、別のモンスター効果で即特殊召喚、というまったく無駄のない動きに関心する。しかしファーニマルモンスターが現在のアクションフィールドにマッチしていることもあいまって《エツジインプ・チエーン》がひどく浮いて見えた。

「お楽しみはこれからだよ！《ファーニマル・オウル》を召喚！召喚成功時、効果発動！デッキから《融合》を手札に加える！…魔法カード《融合》を発動！フィールドより《ファーニマル・シープ》と《エツジインプ・チエーン》を融合！——迷える子羊よ、悪魔の鎖よ！神秘の渦にひとつとなりて、新たな力と姿をみせよ！——融合召喚！！現れ出ちゃえ！すべてを封じる鎖のケダモノ！《デストーイ・チエーン・シープ》！」

融合の合図の下に《ファーニマル・シープ》が変貌してゆく。ものの数秒後には羊が鎖で縛られた姿をした不気味なモンスター、《デストーイ・チエーン・シープ》が正体を現した。

「僕はカード一枚セツトして、ターンエンド！…みんなー！…どう？基本的に融合召喚はカードの消費が荒いんだけど、ほら！僕のフィールドと手札には合わせて7枚もカードがあるよ！ま、要するに”カード・アドバンテージ”は大事にしろ、つてこと！…だよね、未来！」

「その通りだ。だがあまりにも上手くやるものだから驚いたぞ、素良。」

「へへーん！さつ、次は未来の番だよ！」

素良 LP 4000 Hand:3

フィールド:2

☆5 《デストーイ・チエーン・シープ》 DEF / 2000

☆2 《ファーニマル・オウル》 ATK / 1000

魔法・罠：2 『トイポット』、セットカード1枚

カード・アドバンテージの概念については俺が遊勝塾に来て以来、『攻撃力や相手へのダメージよりも自分の手元にカードを集めることが大切にしろ!』と口酸つぱく言っている。それを生徒が自分のものとし、実践している。教育者のタマゴとして喜びを感じる瞬間だ…しかし俺のターンではなく、番、か。これ以上のことをこのターンでやれ、というのは少しハードルが高いが…

「俺のターン、ドロー!」

…あつ。

「? 未来、どーしたのー? もしかして手札事故?」

「いや、そろつてしまつてな。」

「?」

「行くぞ、『召喚僧サモンプリースト』を召喚! このモンスターは召喚されたとき、自身を守備表示にする。手札の魔法カード1枚を墓地に捨て、効果発動! デッキからレベル4モンスター一体を特殊召喚する。出でよ『終末の騎士』! 特殊召喚成功時、効果発動! デッキから闇属性モンスター一体を墓地に送る…『儀式魔人リリーサー』を墓地へ! …俺は『召喚僧サモンプリースト』と『終末の騎士』で、オーバーレイ!」

「ツ!」

今、わずかだが素良の表情が一瞬、険しくなった。俺はかまわずプレイを続ける。

「2体のモンスターで、オーバーレイネットワークを構築…

エクシーズ 召喚 !!ランク4、『ラヴァルバル・チエイン』!

ン!」

『召喚僧サモンプリースト』と『終末の騎士』が消えていった渦の中から現れたのは、炎を纏った海竜、『ラヴァルバル・チエイン』。俺のほとんどのデッキになら、一枚はデッキに入れておきたい汎用性の高いモンスターだ。

「チエインのモンスター効果、発動! オーバーレイ・ユニットを一つ取

り除くことで、デッキのカード1枚を墓地に送る。《儀式魔人デモリツシャー》を墓地へ！」

「未来兄ちゃん、へんてこなモンスターばつか墓地に送つてどうするんだろ？」

「さあ・・・？」

このデッキの切り札へのお膳立てが着々と進んでゆく。この手順で呼ぶことができたのは数えるほどしかないのだが・・・

「下準備はこれが最後だ。手札から、魔法発動！《儀式の準備》！デッキからレベル7以下の儀式モンスターを手札に加える。俺が手札に加えるのは・・・レベル6、《りゆうきしん龍姫神サフィラ》！」

「今度のデッキは儀式モンスター？珍しいね。」

「そうか？おつと、忘れるところだつた。《儀式の準備》のもう一つの効果、儀式モンスターを手札に加えた後、墓地の儀式魔法を手札に加える」

「？」

「儀式魔法？」

「未来兄ちゃんの墓地に？」

年少組がいっせいに頭の上に「？」マークを浮かべる。

「えーっと、未来の墓地には2体の「儀式魔人」に《ラヴァルバル・チエイン》のオーバーレイ・ユニットとして墓地に送られた《召喚僧サモンプリースト》が・・・」

遊矢が確認するように墓地に落ちていったカードたちを挙げてゆく。ここまで言つて、柚子は気がついたようだ。

「サモンプリースト・・・？ そうよ！ 未来はサモンプリーストの効果コストで最初に手札の魔法カードを捨てたわ！」

「ふつ、正解だ柚子。答え合わせだ！ 俺は墓地から儀式魔法、《祝祷の聖歌》を手札に加える！ そして、発動せよ、《祝祷の聖歌》！ これは《しゅくどう龍姫神サフィラ》召喚の儀式を行うカード。俺は・・・墓地のレベル3

の『儀式魔人リリーサー』と『儀式魔人デモリッシュヤー』をリリースの代わりとして贊に捧げる!』

「墓地のモンスターをリリースだつて!?」

「儀式魔人」の名は伊達じやない。このカードたちは儀式召喚が行われる際、墓地から除外することでそのレベル分のリリースとして扱うことができる!さあ、供物は揃つた。——集いし祈りに導かれ、清き竜人が舞い降りる!光指す道となれ!—— 儀式召喚!!レベル6、『竜姫神サファイラ』、降臨!』

儀式魔法の発動を合図にフィールドが教会風の祭壇に切り替わる。設置された魔方陣に光が差し込み、その中から美しい翼を持った竜人が現れた。

「攻撃力2500か……でも!『デストーイ・チエーン・シープ』は戦闘で破壊された時、1ターンに1度だけ攻撃力を800ポイントアップさせて墓地から復活するよ!」

『特殊召喚』か……残念だが素良、お前はもう特殊召喚はできないぞ』

「!?……まさかそれがサファイラの効果!』

「いや、正確には違う。「儀式魔人」モンスターは儀式召喚に使用された時、召喚された儀式モンスターに”効果を与える効果”を持つている。デモリッシュヤーを使用して儀式召喚されたモンスターはカード効果の対象にならず、リリーサーを使用した儀式モンスターが存在する限り、相手はモンスターを特殊召喚できない!』

『そんな、効果の対象にならなくなる効果まで!?これじやあ……!』

『ファーニマル』モンスターは単体での攻撃力は高くない。ライフを0にできるわけではないが、このターンで勝負を決める!

『バトルフェイズ!』『ラヴァルバル・チエイン』で『ファーニマル・オウル』を攻撃!』

「——なーんちやつてっ!リバースカードオープン!トラップ発動、『聖なるバリアーミラーフォース』!』

「何!?」

「『デストーイ・マーチ』じゃ……ない!?」

「どうして? 強力な罠なのに!」

フローシとタツヤ、アユが驚愕の声を上げた。俺もさすがに目を剥く。両方とも伏せる選択もあるのに、俺の油断を誘うために……まさかこんな駆け引きをしてくるとは!

「その強力な罠を未来がホイホイ踏むわけないと思つてね、未来なら『デストーイ・マーチ』を発動させずにチエーン・シープを突破するためにモンスターを並べてくると読んだのさ!」

「そこまで考えて……」

「シビれるウ!」

「……サファイラには本当に驚かされたけど、ミラーフオースならデモリツシャーにも邪魔されないでしょ? これで返り討ちだー!」

『ラヴァルバル・チエイン』の吹いた火の玉が突如現れたドーム上のバリアに反射され、逆にチエインを貫いた。そのまま勢いを増して背後のサファイラに襲い掛かる!

「……なんで……!」

「……かに見えたが、炎の玉はサファイラに触れた途端に搔き消えた。

「……危なかつた。墓地にあつた『祝祷の聖歌』にはもう一つ効果がある。自分フィールド上の儀式モンスターが破壊される場合、代わりに墓地のこのカードを除外することができるんだ」

「くつ……! ハツ!」

素良が何かに弾かれた様に走り出した。……恐らくA カードだ
アクション

ろう。切り替えが早いな。……だが間に合うかな!

「行くぞ！《竜姫神サファイラ》で、《デストーイ・チエーン・シープ》を攻撃！照らせ！」

“セイントリ・グロー！！”

「アクションマジック《奇跡》！モンスター一体を戦闘破壊から守り、受けるダメージを半分にする！」

《デストーイ・チエーン・シープ》の頭上から一筋の光芒が降りかかる。対象を一瞬で蒸発させかねないほどの熱量を持った光に焼かれたかに見えたチエーン・シープであつたが、光がおさまるとそこには《奇跡》の効果に守られて健在な姿があつた。

「よく耐えたな」

「特殊召喚ができない今、《デストーイ・チエーン・シープ》が頼みの綱だからね……」

「バトルフェイズを終了し、エンドフェイズへ。ここで《竜姫神サファイラ》本来の効果を発動！」

「エンドフェイズに……？」

「サファイラが儀式召喚に成功したターンのエンドフェイズ、3つの効果から1つを選んで適用する。その1、デッキからカードを2枚ドローした後、手札を一枚捨てる。その2、相手の手札をランダムに一枚選んで捨てる。その3、自分の墓地の光属性モンスター一体を手札に加える。俺は第一の効果を適用し、ドロー！手札を一枚、墓地へ……これでターンエンドだ」

デュエルディスクのターン表示が素良を示した。

未来 LP4000 hand:3

フィールド:1 ☆6 《竜姫神サファイラ》 ATK/2500
魔法・罠:1 伏せカード1枚

「（げつ、また《祝祷の聖歌》が墓地に……）

最後に墓地に送られたカードを見て、素良は顔をしかめた。虎の子

のミラーフォースが半ば不発に終わつた今、多少強引にもあのモンスターを突破しなくてはならないというのに……

「（でも、そんな時のための A カードだ！）僕のターン！ドロー！」

素良は再び走り出しながらカードをドローする。

「僕は『トイポット』の効果で『ファーニマル・ウイング』を捨てて、カードを一枚ドローする！」

「表側表示のカードの効果が発動した時、手札から『幽鬼うさぎ』の効果発動！このカードを墓地に捨て、発動したカードを破壊する。永続魔法の『トイポット』が破壊されたことにより、ドローは無効だ！」
「！でも、『トイポット』の効果発動！このカードが墓地に送られた場合、デッキから『ファーニマル』モンスターか『エツジインプ・シザー』を手札に加えることができる！僕は『ファーニマル・ベア』を手札に加えて、効果発動！手札から捨てることで、デッキから新たな『トイポット』をセット！」

「何故……？」

「フィールドに『トイポット』、墓地に『ファーニマル・ウイング』がある状況を作りたかったのさ！墓地の『ファーニマル・ウイング』の効果を発動！自分フィールドに『トイポット』がある場合、墓地にあるこのカードと『ファーニマル』モンスターを除外することでカードを一枚ドローする！『ファーニマル・ベア』を除外。その後フィールドの『トイポット』を墓地に送ることでもう一枚ドローできる！合計2枚ドロー！さらに『トイポット』が墓地に送られたことで、効果によりデッキから『エツジインプ・シザー』を手札に加えるよ！」

『トイポット』と『ファーニマル・ウイング』のコンボで素良の手札は一気に6枚に増える。サフライラきえいなければいくらでもモンスターを展開できるのに……と口の中のヤンデイを噛み砕きそうになる。

「（だめだ！冷静になれ……なんとか勝ち筋を見出すんだ！）アクションカード、ゲット！……よし！『エツジインプ・トマホーク』を通常召喚！効果を発動、手札の『エツジインプ』モンスター、『エツジインプ・シザー』を手札を捨て、相手に800ポイントのダメージ！」

「・・・ツ！」

未来 LP4000→3200

「そしてアクションマジック、《ムテキ・ヤンデイ》を発動！自分のモンスター一体は戦闘破壊されず、相手モンスターと戦闘する場合、戦闘ダメージを相手に与え、ダメージステップ終了時にその相手モンスターを破壊する！僕はチエーン・シープを選択！」

チエーン・シープが目の前に現れたペロペロキヤンデイを丸呑みにすると、その体が七色に輝きだした。いかにも「無敵」といった雰囲気をかもし出している。

「！」

今度は未来がAカードを探しに走り出した。

「ファーニマル・オウルを守備表示に変更。チエーン・シープを攻撃表示にして・・・バトルだ！《デストーイ・チエーン・シープ》で、サフィラを攻撃！」

「アクションカード、ゲット！」

「無駄だよ！《デストーイ・チエーン・シープ》がバトルするとき、相手はモンスター・魔法・罠の効果を発動できない！」

未来 LP : 3200→2700

「くつ！サフィラが破壊される代わりに墓地の《祝祷の聖歌》を除外する・・・」

チエーン・シープの放った鎖がサフィラを捕らえて締め上げるが、聖歌の加護を受けたサフィラにすぐさま鎖を振りほどかれてしまった。

「・・・あれ？《デストーイ・チエーン・シープ》の効果で、未来兄ちゃんは魔法カードを発動できないんじゃなかつたの？」

「いい質問だアユ。《祝祷の聖歌》の効果は”チエーンブロックを作ら

ない効果”。つまり俺は効果を発動したわけじゃないんだ。」

「??」

「・・・よし、次の授業のテーマはこれにしよう」

「余裕だね、未来。カードを2枚伏せてターンエンド」

「待った！ エンドフェイズにサファイラの効果発動する。このカードの効果は光属性モンスターが手札かデッキから墓地に送られたターンにも発動できるんだ。《幽鬼うさぎ》は光属性。俺は再び第一の効果を選択し、2枚ドロー。手札のアクションマジック《回避》を捨てる」

「・・・僕は今度こそターンエンド！」

素良 LP40000 hand : 2

フィールド : 3

☆5 《デストライ・チエーン・シープ》 ATK / 2000

☆2 《ファーニマル・オウル》 DEF / 1000

☆4 《エツジインプ・トマホーク》 ATK / 1800

魔法・罠 : 2 伏せカード2枚

　　サファイラの除去を諦めてバーンダメージに切り替えてきたかと思つたが、Aカードとのコンボで《オネスト》をかわしつつ破壊耐性を削りに来たか・・・油断できないな。手札のこいつで一気に勝負をかける！

「俺のターン、ドロー！ 魔法カード《ソーラー・エクスチエンジ》を発動！ 手札の「ライトロード」モンスターを捨て、デッキから2枚ドローする。《ライトロード・アサシン ライデン》を捨てて、ドロー！ その後、デッキの上から2枚のカードを墓地に送る。」

「・・・いける！」

「《ライトロード・サモナー ルミナス》を召喚！ 手札の《ライトロード・ハンター ライコウ》を捨て、効果発動！ 1ターンに一度、手札

を一枚捨てることで、墓地の「ライトロード」を特殊召喚する！『ライトロード・アサシン ライデン』を特殊召喚！』

「ぐつ・・・！」

これが『虚無空間』ヴァニティ・スペースや『大天使クリステイア』に無いリリーサーの強み。相手の特殊召喚のみを一方的に封じ、自分は好きに展開できる。上手くはまればとんでもない制圧力を誇るのだ。

「ライデンの効果発動！ 1ターンに一度、デッキの上からカードを2枚墓地に送る。そのカードの中に「ライトロード」モンスターがあつた場合、攻撃力が200アップする。2枚のカードの中には『ライトロード・マジシャン ライラ』があつた。よつてライデンの攻撃力は1900となる」

「トマホークの攻撃力を超えてきたか・・・」

「攻撃力は問題じゃない。俺はレベル3のルミナスに、レベル4のライデンをチューニング！――集いし決意が、見えざる壁を打ち碎く！ 光差す道となれ！―― シンクロ 召喚 !! 出でよ、レベル

7、『アーカナイト・マジシャン』！」

「シンクロ召喚まで・・・！」

『アーカナイト・マジシャン』がシンクロ召喚に成功したとき、自らに”魔力カウンター”を2つ乗せる。アーカナイトの攻撃力は自身に乗っている魔力カウンターの数×1000アップする

白を基調としたロープをかぶった魔道士・アーカナイト・マジシャンがフィールドに現れると、同時に彼の周りに小さな魔力の塊が2つだけ現れた。

『アーカナイト・マジシャン』 ATK／400→2400

「・・・でも、『アーカナイト・マジシャン』は守備表示じゃないか」「言つたはずだ。攻撃力は問題じゃない。『アーカナイト・マジシャン』はフィールド上の魔力カウンターを1つ取り除くことで相手フィールドのカードを1枚選択し、それを破壊する！ デッキ側のセットカードを破壊！」

「くつー！選択された《融合準備》^{（フュージョン・リザーブ）}を発動！《デストライ・シザー・ベア》の融合素材となる《ファーニマル・ベア》を手札に加え、その後墓地の《融合》を手札に戻す！」

アーカナイト・マジシャンの周りをふわふわと漂っていた魔力カウンターが突然猛スピードで素良のフィールドへ飛来する。宣言通り、セットカードを直撃して小さな爆発とともに消滅した。

「グラフを踏まされたか……だが！」

「もう一度アーカナイトの効果を発動し、自身の魔力カウンターを1つ取り除き、残りのセットカードを破壊！」

「く、《デストライ・マーチ》が……！でもこれでフィールドの魔力カウンターは尽きた！」

「確かに。だが《アーカナイト・マジシャン》の効果は保険に過ぎない」「？」

「ライコウ、ライラ、ルミナス、ライデン……自分の墓地に「ライトコード」が4種以上存在する時、手札から《裁きの龍》^{（ジャッジメント・ドラゴン）}を特殊召喚する！」

真っ白な体を持つ巨大な龍が天空から現れ、地上を見下ろした。

「出たつ！未来の切り札《裁きの龍》！」

「シビれるウー！」

「いつ聞いても頭のおかしい召喚条件ね……」

「皆、このモンスターの効果を知ってるの？」

「10000のライフを払い、フィールドのこのカード以外のカードを全て破壊する！」

「はあ!?」

「『ジャッジメント・オブ・ザ・ライト!』」

咆哮とともに、裁きの龍を中心に光の波動が迸る。アーカナイト・マジシャンやサファイラを巻き込んで場の全てを包み込んだ。

「さらに、《ソーラー・エクスチエンジ》によつて墓地に送られた最後の《祝祷の聖歌》を除外して《竜神姫サファイラ》を破壊から守る！」

「そんな……！」

フィールドに存在するのは2体の竜のみ。並び立つ姿に神々しさ
さえ感じる。

「・・・2体のモンスターで、ダイレクトアタックだ！」

「う、うわーーーー！」

素良 LP4000→1500→0

—W i n n e r : M i r a i ! —

「ねえもう一回！もう一回だけデュエルしよう未来！今度はぜつたい
突破して見せるからさあ！」

デュエルが終わり、ソリッドビジョンが解除されるやいなや、素良
が詰め寄ってきた。なかなかのしたたかさだ・・・

「今日はもうやめにしよう。なに、また何時でも相手になるさ」

「うう、今約束したからね！」

ぐぬぬぬと唸る素良。ちなみにあのサフイラに対する手軽な対処
としては『帝王の烈旋』などによるリリースや『神風のバリアーエア・
フォース』による全体バウンスが挙げられる。

「さて、皆。このデュエルから”特殊召喚”がデュエルの勝敗に大き
く影響していることはわかつて貰えたか？」

「ああ。でもそれにしても今回は随分えげつない戦法をとったな、未
来・・・」

遊矢が若干表情を引きつらせながら答えた。

「その方が皆の記憶に残りやすいと思つて・・・」

「トラウマになつたらどうするのよっ！」

「・・・と、ハリセンで柚子にツッコまれてしまつた。少し痛いが、俺
は遊勝塾の一員なのだと実感できて悪い気分じやない。

その後でちびっ子三人に「対象を取る」つて何?」「チエーンブロツクを作らない効果つて?」と質問攻めにあい、結局授業時間が延びてしまったのはここだけの話だ。

第二講

「これは決着をつけるための、デュエル……引き分けなど、ありませんわ！」

遊勝塾に一人の女性の声が響く。 L D S の赤馬日美香理事長のものだ。

X エクシーズ， 融合， S シンクロ コースの主席生徒・志島北斗， 光津真澄， 刀堂刃を引き連れて現れ、 舞網市議会議員の息子・沢渡シンゴを闇討ちした——死んでしまったわけではない——犯人が遊矢だと主張し、 引き渡しを要求してきた。しかし、 実際は LDS の生徒が他校の生徒に敗北したことの汚名返上として、 勝利した暁には遊勝塾を LDS に併合するという。三番勝負の結果は一勝一敗一分け。 向こうの勝利条件の達成は阻止されたかに思われたが……

『いや！ だが、 実際デュエルは引き分けだつたわけで……！』

予想外の展開に修造塾長が戸惑いの声を上げる。このまま話が進めば互いに一勝をあげた遊矢と光津真澄とでデュエルすることになりそうだが、 筋の通らない話に俺もそろそろ黙つていられない。先手を打たせてもらおう。

「……そんなに四戦目がしたいなら、 俺が相手になろう。」

「！」

「未来!?」

「未来殿……」

遊勝塾の面々だけでなく、 LDS の四人も目を見開いた。

「裏切り者め……」

「……」

理事長の小さなつぶやきが聞こえた。「裏切り者」か……だが、 こちらも引くわけにはいかない。帽子をかぶりなおし、 気合を入れる。

「……いいわ、 私がやる。」

一步前に出てきたのは先ほど【ジェムナイト】 デッキで柚子を圧倒した光津真澄だ。

「ユースの優勝者とデュエルできるなんて貴重な経験だわ。しかも状況が状況、本気でお相手してもらえるでしょ？先輩……」

「勿論だ」

「——待て」

「!？」

踵を返し、デュエル場に向かおうとした時、俺たちから死角になつていた曲がり角から一人の長身の少年が現れた。フードを目深にかぶり、顔は見えない。だが間違いない！こいつは――

「決着は私がつけよう」

「零児……！」

「（レイイジ……？あの少年、どこかで……）」

男がフードを外す。白髪に眼鏡。LDS現社長・赤馬零児その人だつた。

デュエル場に赤馬零児と十六夜未来の二人が出揃つた頃、観戦デッキでは……

「……しかし、思わぬ幸運だぜ……こんなところでの赤馬零児と十六夜未来のデュエルが間近で見られるなんてよ……！」

「ああ。LDSの黄金世代の二人だ……変な顔してどうした、真澄。そんなに十六夜未来とのデュエルを社長に取られたのが悔しいか？それとも戦わずにするでホツとしているのかい？」

「うつさい。まあ、榊遊矢に負けたあんたよりは見られるデュエルができる自信はあつたかしらね？」

「がつ！」

「（……十六夜未来と会話しちゃつた……！）」

刀堂刃は眼下で向かい合う決闘者のツーショットに興奮を露わにしている。志島北斗はそれに賛同しながら隣の光津真澄に嫌味を言ふが、真澄に手痛い反撃を受け、沈黙してしまつた。

一方、こちらは遊勝塾側。

「・・・」

未来をじつと見つめていたアユが、その表情の変化に気づいた。

「未来兄ちゃん、笑ってる・・・？」

「・・・へえー。未来を戦う前からあんな力オきせるなんてねえ」

見たことの無い未来の表情に、素良はこれから始まるデュエルへの期待感が高まっていた。

そんな中、遊勝塾のエース・榎遊矢は浮かない顔をしている。

「（未来に、戦わせてよかつたのか？自分の母校を敵に回すようなことさせて・・・いや、それ以前に父さんの塾は、父さんのデュエルは俺の手で守らなきやいけないのに・・・）」

「遊矢！」

「！」

不意に声が響いた。顔を上げると、デュエル場から未来が真っ直ぐに遊矢を見上げてきている。

「すまない遊矢。貴重なデュエルの機会を奪つてしまつて。・・・本当はお前がデュエルしたかつたんだろう」

「未来、俺・・・」

「だが心配するな。お前達の・・・いや、俺達の塾を、俺にも守らせてほしい！だから笑え。笑顔で応援してくれ、遊矢！」

――そうだ！未来だつて遊勝塾の・・・俺達の仲間じやないか！

「・・・フレー！フレー！ミ！ラ！イ！」

「遊矢！」

遊矢が立ち上がり、大声でエールを送る。その表情はもちろん満面の笑顔だ。すぐ隣にいた柚子は面食らつてツッコミのタイミングを逃してしまつたが。

「なあ未来！ただデュエルするだけじゃつまらないだろ？遊勝塾の先生として見せてくれよ！最高のエンタメデュエルをさ！」

「ふつ、こんな時に無茶を言うな！（・・・だがそれに答えてこそそのエンターテイナー、か）」

さて、零児と最後にデュエルをしたのは二年前だつたな。久し振りの真剣勝負に自然と口角が吊り上つているのが自分でも分かる。・・・引き攣り気味じやないといいが。

「待たせてすまない、零児。・・・フィールドはランダムでいいか」「ああ」

「塾長、頼む」

『おう！（・・・さつきの未来の反応といい、あの少年はやはり赤馬零児！未来と同等、いやそれ以上の実力者だ・・・！ならば卑怯と言われようがここは塾のため！）アクションフィールド、ON！フィールド魔法、《ジャステイス・ワールド》!!』

足元が光に覆われ、地面がせり上がりゆき、フィールドが形成される。まず目に入るのは二本の巨大の柱。その奥には小高い丘に沿つて建物が並び、その頂点には巨大な神殿が鎮座している。フィールド自体が高所設定なのか、妙に日差しが眩しく感じられる。「ライトロード」達の故郷、ジャステイス・ワールドがそこに広がっていた。

「・・・塾長？」

”ランダム”と言つたはずだが？・・・と続けようとした時、

「構わん。これもアウエーの洗礼だと思つておこう」

丘の頂点、神殿の正面に立つ零児が俺の言葉を遮つた。・・・ならば本来神殿^{ホーム}前に立つてゐるのは俺のはずじやないのか？

『ジャステイス・ワールド』は未来殿が使い慣れる「ライトロード」モ

ンスターのホームグラウンドだ……！塾長！漢気溢れる援護射撃だッ！

そう言うのは遊矢の親友・権現坂昇。ごんげんざかのぼる。遊勝塾の生徒ではないが、友情のために「刀堂刃とは相性が悪い」と判断した素良に代わって助つ人として参戦。高速シンク口の【X—セイバー】相手に”不動のデュエル”というモンスター効果を活かすために敢えてA_{アクション}カードを取らない戦法で真っ向から立ち向かい、見事引き分けに持ち込んで見せた。

「（俺にできるのはここまでだ……後は頼むぞ、未来！）」

「（……ここまでしてもらつて、生徒の前で無様なデュエルをすることはできないな！）

——D u e l M o d e o n, s t a n d b y ——

「……先攻も俺でいいか？」

「できるならばジャンケンで決めよう。いつもそうだつた様にな」「ふつ、仕方ないな」

言いながらディスクを操作し”パー”のコマンドをタップする。零児は”チョキ”。……やはり先攻が欲しかったようだ。……そういうえば零児、「アレ」をやつてくれるのか？と一瞬考えたが、観客席から声が聞こえる。どうやら柚子や遊矢たちが音頭を取ってくれるらしい。

「戦いの殿堂に集いし決闘者達が！」

「モンスターと共に地をけり宙を舞い！」

「フイールド内を駆けめぐるウ！」

「みよ！これぞデュエルの最強進化系ーー！」

「アクション——！」

「デュエル！」

M i r a i L P 4 0 0 0 V S R e i j i L P 4 0 0 0

「では私のターン。私は手札から永続魔法《地獄門の契約書》を発動す

る。このカードが表側表示で存在する限り、自分のスタンバイフェイズに10000ポイントのダメージを受ける

いきなり来たか・・・

「さらに、1ターンに一度、デッキから『DD』モンスター1体を手札に加えることができる。私は

『DDリリス』を手札に加える

『地獄門の契約書』効果に観客席から驚きと困惑の声が上がる。ほとんどが10000ポイントという大きいダメージに対するものだが・・・アユは違った。

「未来兄ちゃんが言つてた・・・」ライフよりアドバンテージ”的・・・のままじや毎ターン手札を増やされちゃう!」

「ほう。あの年齢でアドバンテージを見るとは・・・君の指導か」

「ああ。(アユ、ちゃんと気付いてくれて先生は嬉しいぞ)」

「続けようか。2枚目の永続魔法、『魔神王の契約書』を発動。このカードは自分のスタンバイフェイズに自分自身が10000のダメージを受ける。そして1ターンに一度、悪魔族の融合モンスターによって決められた融合素材をフィールドか手札から墓地に送り、その融合モンスター1体を融合召喚できる」

「へえ、じゃあ毎ターン融合召喚ができるんだ・・・!」

融合に理解の深い素良が真っ先に興味を示す。やはり、こと融合のこととなると目の色が変わるな。そういうえば『デストーイ』モンスターは悪魔族だつたか。しかし融合魔法とは・・・零児の奴いつの間に融合を使うようになつたんだ?

「手札より『DDリリス』と『DDケルベロス』を融合!――牙剥く地獄の番犬よ、闇より誘う妖婦よ、冥府に渦巻く光の中で今、ひとつとなりて新たな王を生み出さん!――

融合召喚!生誕せよ!『DDD烈火王テムジン』!」

炎のオーラを纏つた戦士風のモンスターが融合の渦の中から現れ、

零児の傍に降り立つた。攻撃力は2000。さして高い数値とはいえないが、零児は通常召喚権を残している……といふことは。

「これで終わりではないんだろう?」

「当然だ、君相手にこの程度では心許ない。チューナーモンスター『Dナイト・ハウリング』を通常召喚!」

チューナー? · · · まさか。

『DDナイト・ハウリング』の効果発動! 召喚成功時、墓地の「DD」モンスター1体を攻・守を0にして特殊召喚する。蘇れ、『DDリリス』! 私はレベル4の『DDリリス』にレベル3の『DDナイト・ハウリング』をチューニング! ——闇を切り裂く咆哮よ、疾風の速さを得て新たな王の産声となれ! ——シンクロ召喚! 生誕せよ! レベル7、『DDD疾風王アレクサンダー』!

風の中から続いて現れたのはまたもや戦士風のモンスター。片刃の剣を振りかざし、マントに身を包んだ騎士然とした佇まいにテムジンとは反対側についた。

「まだ終わりではない。この瞬間『DDD烈火王テムジン』の効果発動! 自分フィールドにこのカード以外の「DD」モンスターが特殊召喚された場合、墓地の「DD」モンスター1体を特殊召喚する。『DDケルベロス』を特殊召喚!」

「! まだ何かする気か!?

「さらに『DDD疾風王アレクサンダー』の効果発動! このモンスターもまた、自分フィールドにこのカード以外の「DD」モンスターが特殊召喚された場合、墓地の「DD」モンスター1体を特殊召喚する効果を持つている。再び蘇れ、『DDリリス』! 特殊召喚成功時、『DDリリス』の効果を発動! 墓地の「DD」モンスターを手札に加える。『DDナイト・ハウリング』を手札に! · · · 私はレベル4の『DDリリス』と『DDケルベロス』で、オーバーレイ! 2体のモンスターで、世界の頂きに降臨せよ! ——エクシーズ召喚! 生誕せよ! ランク4! 『DDD怒涛王シーザー』!」

『DDリリス』と『DDケルベロス』は紫色に輝く光となり、銀河の

ようには渦巻く穴に吸い込まれていく。一瞬のまばゆい光の後、青の鎧を纏つた3人目の王、『DDD怒涛王シーザー』が現れ、テムジン、アレクサンダーと共に零兎を守るかの様に陣を組んだ。

「シンクロやエクシーズまでも・・・」

「なんて奴だ・・・！」

「『闇の誘惑』を発動。デッキから2枚ドローし、その後手札の闇属性モンスター1体を除外する。『DDナイト・ハウリング』を除外・・・カードを2枚セットし、ターンエンドだ」

フィールドには歴史上の偉人の名を持つ3人の王。手札は0だが、新たに伏せられた2枚のカードがモンスター達と共にプレッシャーをかけてくる。俺は結局引き攣ってしまった笑みをそれでも顔に貼り付けて崩すべき牙城を睨んだ。

零兎 LP4000 hand:0

フィールド:3 ☆6 『DDD烈火王テムジン』 ATK/200

2500 0
☆7 『DDD疾風王アレクサンダー』 ATK/240

★4 『DDD怒涛王シーザー』 ATK/240

魔法・罠:4 『地獄門の契約書』、『魔神王の契約書』
伏せカード2枚

「・・・少しは驚いてもらえたかな？」

「ああ、俺も負けてられないぜ」

「（ふつ、これだけしてもただ闘争心を煽る程度か。やはり大した決闘者だ、十六夜未来）」

「俺のターン！」

意気込んだのはいいが、この手札から零児に追いつくには多少運に頼ることになるだろう。デツキのカードを信じてデツキから1枚だけカードを引き抜いた。

「ドロー！・・・手札から『レベル・ウォリアー』を特殊召喚！このモンスターは本来レベル3だが、相手フィールドにのみモンスターが存在する場合、レベル4モンスターとして手札から特殊召喚できる！続いて手札から魔法カード、『おろかな埋葬』を発動！デツキからモンスターを1体、墓地に送る・・・『ライトロード・ビースト ウォルフ』を墓地へ。この瞬間『ライトロード・ビースト ウォルフ』の効果発動！デツキから直接墓地に送られたとき、墓地から特殊召喚される！」

「召喚権を使わずにモンスターをそろえてきたか・・・」

「・・・レベル4の『レベル・ウォリアー』と『ライトロード・ビースト ウォルフ』で、オーバーレイ！2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築——集いし信仰が、翼に宿りて天に舞う！光差す道となれ！——エ ク シ 一 ズ 召 喚 ！ 降臨せよ！ランク4、『ライトロード・セイント ミネルバ』！」

光が止むと、白いフクロウを傍に従えた一人の少女がジャステインス・ワールドに降り立つた。が、彼女は神殿前に零児のモンスター達を見つけると途端に肩をいからせ頬を膨らませてしまう。自分達の故郷の象徴を占領されて思うところあるのは分かるが、折角の登場が台無しだ。

「・・・ミネルバ、効果発動！オーバーレイユニット（『レベル・ウォリアー』）を1つ使い、デツキの上から3枚のカードを墓地へ送る！この時、墓地に送られたカードの中に『ライトロード』カードがあれば、その数だけ俺はデツキからドローする！」

「ほう、墓地肥やしと手札の増強を一度に・・・」
「ここが正念場だ・・・頼む、来てくれと念じながら、俺はカードをめくつた。

『ライトロード・マジシャン ライラ』

『オネスト』

『ジェット・シンクロン』

「！俺は一枚ドロー！」

「無難に引いてきたか・・・」

「無難？それは違う。無駄な落ちなど一枚も無いほどの完璧な引きだ！」

「墓地の光属性モンスター『オネスト』を除外することで、手札からこのモンスターを特殊召喚することができる！來い、『暗黒竜 コラップサーペント』！さらに墓地の『ジェット・シンクロン』の効果発動！1ターンに1度、手札を1枚捨てることで墓地のこのカードを特殊召喚する！ただし、この効果で特殊召喚したこのカードがフィールドを離れる場合、ゲームから除外される。・・・俺は、レベル4の『暗黒竜 コラップサーペント』に、レベル1の『ジェット・シンクロン』をチューニング！ シンクロ 召喚！ 来い！ レベル5、『TG ハイパー・ライブラリアン』！」

『ジェット・シンクロン』が一枚のリングに変わり、コラップサーペントがそのリングをぐぐつてゆく。次の瞬間リングの中を緑色に輝く光が駆け抜け、白装束に身を包んだ司書、『TG ハイパー・ライブラリアン』が現れた。

「俺は『暗黒竜 コラップサーペント』の効果発動！このカードがフィールドから墓地に送られた場合、デッキから『輝白竜 ワイバースター』を手札に加えることができる！・・・続けていくぞ！チューナーモンスター『デブリ・ドラゴン』を召喚！このモンスターが召喚された時、墓地の攻撃力500以下のモンスターを効果を無効にして攻撃表示で特殊召喚する！蘇れ、『レベル・ウォリアー』！そして、レベル3・光属性の『レベル・ウォリアー』に、レベル4の『デブリ・ドラゴン』をチューニング！――集いし涙が、救いの戦士を呼び起こす！光差す道となれ！―― シンクロ 召喚！ 降臨せよ！ レベル7、『ライトロード・アーク ミカエル』！」

調和の光が天を貫く。金色の鎧に身を包む戦士、『ライトロード・

アーク ミカエル》が空から姿を現した。

「未来の連続シンクロだ！」
「シビれるうー！」

「ハイパー・ライブラリアンがフィールドに存在し、シンクロ召喚が行われた時、俺はカードを1枚ドローする！…そして魔法カード《ミラクルシンクロフュージョン》を、発動！」

「何！」

このカードは元々俺のデッキには入つていなかつたが、素良に「融合が見たい」とせがまれ、俺が使えそうなカードを何とか探し出してデッキに組み込んだものだ。まさかこんなに早く出番が来るとはな。
「このカードは、”Sモンスター”を素材に要求する融合モンスター”によつて決められた融合素材をフィールドか墓地から除外することで、その融合モンスター1体を融合召喚する！俺が融合するのは、場の魔法使い族Sモンスター《TGハイパー・ライブラリアン》と、墓地の魔法使い族、《ライトロード・マジシャン ライラ》！——白く気高き魂持ちし魔導士よ！黒衣纏いて奇跡の渦より生まれ変われ！——融合召喚！現れよ！《霸魔導士アーカナイト・マジシャン》！」

「…未来のフィールドにも融合、S^{シンクロ}、X^{エクシーズ}が並んだ…！」
「すごい…！」
「ほう…」

両陣営に融合、S、Xモンスターが並び立つ光景に観客達も見入っている。サプリライズになつたなら何よりも内心胸をなでおろす。
《霸魔導士アーカナイト・マジシャン》が融合召喚に成功した時、自らに魔力カウンターを2つ乗せる。アーカナイトの攻撃力はこのカードに乗つている魔力カウンター1つにつき1000ポイントアップする！」

『霸魔導士アーカナイト・マジシャン』ATK／1400→3400

「《ライトロード・アーク ミカエル》の効果、発動！ライフを1000支払い、フィールド上のカード1枚を除外する！俺が選択するのは、疾風王アレクサンダー！」

「く……」

ミカエルが剣を天に掲げるとそこから強い光が発せられた。光がおさまりフィールドを確認できるようになると、アレクサンダーだけが忽然とその姿を消していた。

未来 LP4000→3000

戦闘準備が整い、俺は零児の居る神殿にたどり着くべく走り出した。

「バトル！ミカエルで《DDD烈火王テムジン》を攻撃！」

「ダメージステップに、リバースカードオープン！永続罠《戦乙女の契約書》！このカードが存在する限り、相手ターン中私の悪魔族モンスターは攻撃力が1000ポイントアップする」

《DDD烈火王テムジン》 ATK／2000→3000
《DDD怒涛王シーザー》 ATK／2400→3400

相手ターン中限定とはいえ厄介なコンバットトリックだ……だがこのフィールドでは戦い慣れている。俺は加速して視界に捉えていたAアクションカードに向かつて一息で距離を詰めた。

「アクションマジック発動！《ソーラー・リチャージ》！自分フィールドのモンスター1体の攻撃力を1000ポイントアップさせる！《ライトロード・アーク ミカエル》を選択！」

《ライトロード・アーク ミカエル》 ATK／2600→3600

「サンライト・ブレイド!」

「!私は怒涛王シーザーの効果を発動!」

ミカエルが放った剣圧がテムジンを両断し、爆発を起こした。爆風は戦闘ダメージとして零児に襲い掛かり、無傷のライフから600ポイントを削った。

零児 LP4000→3400

「(1000ポイントのパンプアップはきついな)…俺はこれでバトルフェイズを終了する」

「…『DDD怒涛王シーザー』のエクシーズ効果により、このターンのバトルフェイズ終了時に同ターン中に破壊された私のモンスターを可能な限り特殊召喚し、次のスタンバイフェイズにこの効果で特殊召喚したモンスター1体につき1000のダメージを受ける」

「?また厄介な…!」

爆風が晴れると、確かに先ほど撃破されたはずの『DDD烈火王テムジン』が復活していた。

「…ならば!俺は霸魔導士アーカナイトの効果発動!1ターンに1度、自分フィールドの魔力カウンターを1つ取り除くことで、フィールドのカード1枚を選択して破壊する!『DDD烈火王テムジン』を選択!」

「リバースカード、オーブン!罠カード『リーズ・ロンダリング契約洗浄』を発動。自分の魔法・罠ゾーンの「契約書」をすべて破壊し、破壊した数だけドローする!その後、破壊した数×1000ポイントのライフを回復する!」

「くつ…」

『霸魔導士アーカナイト・マジシャン』ATK/3400→240

零児 LP3600→6600

「さうに、破壊された『DDD烈火王テムジン』の効果発動！ 破壊された場合、自分の墓地の「契約書」カード1枚を選択して手札に加える。『地獄門の契約書』を手札に！」

「……ミカエルの強制効果でデッキトップ3枚を墓地に送る。俺はこれでターン終了」

神殿前最後の階段に差し掛かったところでちょうど俺のプレイが終了した。息を整えるために、暫し立ち止まる。

未来 LP3000 hand:3

フイールド:3 ★4 『ライトロード・セイント ミネルバ』 A
TK/2000

K/2600

☆7 『ライトロード・アーク ミカエル』 AT

TK/2400

☆10 『霸魔導士アーカナイト・マジシャン』 A

「さすがだ、零児。これだけやつてもひっくり返せないか」

「君こそ見事だった。カテゴリにとらわれずにあらゆるカードを駆使することで私に対抗してくるとは……クールに見せてすぐ熱くなるのも変わらずか」

「……うるさいな。」

「だが……未来、今度は真似できるかな？……榊遊矢！」
「え！」

零児が遊矢に向かつて声を発した。突然話しかけられ、遊矢は困惑

「氣味だ。」

「P 召喚が本当に君一人の力かどうか……そこで見てているがいい

！」

「……？」

「私のターン……ドロー！」

あいつ……未来が”レイジ”って呼んでる奴、何を言つてるんだ…：
？だつてペンデュラムは…

「私は再び『地獄門の契約書』を発動。効果により手札に加えるのは…・Pモンスター、『DD魔導賢者ケプラー』！」

「なんだつて!?」

「私は、スケール1の『DD魔導賢者ガリレイ』とスケール10の『DD魔導賢者ケプラー』で、あベンデュラムスケールをセツティング！」

フィールドの両端に青い柱が現れ、その中空で2体の形容し難いモンスターが停止する。柱に浮かんだ数字は”1”と”10”。俺にとつて見慣れたはずの光景…でも上空にペンデュラムのモニメントは現れず、2本の柱は俺の傍に立つてはいない…

「——我が魂を揺らす大いなる力よ！この身に宿りて、闇を引き裂く新たな光となれ！——

ペンデュラム召喚!!出現せよ、私のモンスター達よ！…全ての王をも統べる3体の超越神、『DDD死偉王ヘル・アーマゲドン』!!

攻撃力3000の巨大なモンスターが3体、未来を取り囲むように現れた。あれは間違いなくP召喚…なんで!?どうしてあいつが…！

「ゆけッ、バトルだ！ヘル・アーマゲドンで『ライトロード・アークミカエル』を攻撃！」

マズい、あんなふうに囮まれてたら未来がAカードを取りにいけない！

未来 LP3000→2600

「ぐつ・・・！」

「つ、未来！」

ヘル・アーマゲドンが放つた無数の光線に《ライトロード・アーカミカエル》は貫かれ、爆散した。・・・このままヘル・アーマgedonのあと2回の攻撃と怒涛王シーザーのダイレクトアタックを受けたら！

「続け！2体のヘル・アーマゲドンで、《霸魔導士アーカナイト・マジシャン》と《ライトロード・セイント ミネルバ》を攻撃！」
「・・・！」

未来 LP2600→2000→1000

「・・・最後に破壊されたミネルバの効果、発動！戦闘、または相手の効果で破壊された場合、デッキの上からカードを3枚墓地に送る！そしてその中の「ライトロード」カードの数だけフィールドのカードを破壊できる！」

「いいぞ未来！これならシーザーの効果発動や攻撃の前に破壊できる！」

「ほう、まだそんな効果を残していたか・・・」
「カードを3枚、墓地へ！」

《スキル・プリズナー》
《ネクロ・ガードナー》
《光の援軍》

「く……！」

そんな……！でも、《ネクロ・ガードナー》が墓地に行つたことは！

「ふ、運が良いのか悪いのか……《DDD怒涛王シーザー》で、ダイレクトアタック！」

「墓地の《ネクロ・ガードナー》の効果発動！墓地から自身を除外し、相手の攻撃を一度だけ無効にする！」

攻撃を終えた悪魔の王たちは未来の周りを離れて主の元へ戻つていつた。なんとか、凌いだ……ほかの塾生の皆さんなど一緒になつてほつ、とため息をついた。でも落ち着いたことで今度は俺の中に疑問が湧き上がつてくる。

「（何者なんだ、アイツ！どこでパンデュラムを……!?）」

俺は思わず手のひらをガラス窓に「ばん！」と叩き付けた。

「なあアンタ……！誰なんだ……？どうして……？」

「落ち着け遊矢。デュエルはまだ、続いているんだ……」

「！未来……」

「……バトルフェイズを終了し、私はこれでターンエンド」

零児 LP6600 hand:0

0
フイールド:4 ★4 《DDD怒涛王シーザー》 ATK/240

K3000

☆8 《DDD死偉王ヘル・アーマゲドン》 AT

K3000

☆8 《DDD死偉王ヘル・アーマゲドン》 AT

K3000

魔法・罠:1 《地獄門の契約書》

ペンドュラム：2 ◇1 『DD魔導賢者ガリレイ』

◇10 『DD魔導賢者ケプラー』

未来は相手フイールドから一瞬たりとも目を離さない。眼に確かな闘志が宿したまま神殿への階段を一段、また一段と上り始めた。・・・決闘の邪魔は誰にも許されない。俺にはこのデュエルを最後まで見届けることしかできない・・・！

「・・・来たか、未来」

「ああ」

やつと神殿までたどり着いたぞ。・・・最後に歩きになつたのは別に疲れたからじやない。この方が映えると思つたんだ。さて、零児の場には大型モンスターが4体、内3体がPモンスターということは倒しても倒しても毎ターン沸いてくるという点が厄介この上無い。ならば、このターンで決めるしかない！

「俺のターン、ドロー！・・・魔法カード『ソーラー・エクスチエンジ』を発動！手札の『ライトロード』モンスター1体を捨て、カードを2枚ドローし、デッキの上からカードを2枚墓地へ送る！手札より『ライトロード・アサシン ライデン』を捨て、2枚をドロー！」

「・・・来たか！」

『デッキの上からカードを2枚、墓地へ！・・・これで墓地の『ライトロード』モンスターは4種となつた！手札より出でよ、俺のモンスター達！嘆きの果てに現る、3体の絶対神！『裁きの龍』！』

「ペンドュラム無しで大量召喚を・・・！」

・・・これがやりたかった！これでフイールドには攻撃力30000のモンスターが3体ずつ（シーザーもいるけど）。この状況と、階段の途中で拾つたAカードのコンボで勝負をつける！

「アクションマジック、『死線』を発動！このターンの戦闘ダメージを

封じる代わりに、自分フィールドの最も攻撃力の低いモンスターが、それ以下の攻撃力を持つ相手モンスターと戦闘する場合、ダメージ計算を行わずに破壊し、その攻撃力分の効果ダメージを与える！」

「！なるほど・・・」

「俺のフィールドの『裁きの龍』は3体とも最も攻撃力の低いモンスターだ！よつてこの効果はこの3体全てに適用される！バトルだ！行け、1体目の『裁きの龍』で、『DDD死偉王ヘル・アーマゲドン』を攻撃！裁きのエレメント・イレイザー！」

ジャッジメント・ドラグーンの吐き出した光の奔流がヘル・アーマゲドンを丸ごと包み、フィールドから消し去った。

零児 LP6600→3600

「く・・・ほう、Pモンスターは破壊されるとエクストラデッキへ送られるのか」

「（知らなかつたのか）次だ！2体目の『裁きの龍』で・・・」

「ヘル・アーマゲドンの効果、発動！」

「何つ!?」

「自分のモンスターが戦闘・効果で破壊された場合、ターン終了までのカードの攻撃力にそのモンスターの元々の攻撃力を加える！破壊されたヘル・アーマゲドンの攻撃力は30000・・・よつて残つた2体の攻撃力は・・・！」

『DDD死偉王ヘル・アーマゲドン』ATK／3000→6000
『DDD死偉王ヘル・アーマゲドン』ATK／3000→6000

60000・・・！

「・・・まだだ！2体目の『裁きの龍』で、『DDD怒涛王シーザー』を攻撃！」

零児 LP3600→1200

「《DDD怒涛王シーザー》がフィールドから墓地に送られた場合、デッキから「契約書」カードを1枚手札に加えることができる。《魔神王の契約書》を手札に」

く、サルベージ効果を持っていたのか！攻撃は迂闊だつたか…？

「…バトルフェイズを終了して、俺はレベル8の《裁きの龍》2体をオーバーレイ！」

「!? これは…！」

「2体のモンスターで、オーバーレイネットワークを構築… エ クシード 召喚！ 出でよ、ランク8！ 《森羅の守神 アルセイ》！ このモンスターは、カード名を1つ宣言することで効果を発動できる！、デッキの一番上のカードをめくり、めくったカードが宣言したカードなら手札に加え、違えば墓地に送る。俺は《オネスト》を宣言して、効果発動！… めくったカードは《ライトロード・ハンターライコウ》。このカードを墓地へ送る」

「違つたがあ…！」

「《オネスト》があれば次のターン持ちこたえられたのに！」

「いや、こつちが本命だ！この瞬間、《森羅の守神 アルセイ》のオーバーレイ・ユニット1つを取り除き、第二の効果を発動！カード効果によつて自分のデッキからカードが墓地へ送られた場合、フィールドのカード1枚を選択して持ち主のデッキの一番上または一番下に戻す！この効果により、《DDD死偉王ヘル・アーマゲドン》をデッキの一番下へ！」

効果の宣言を受け、零児は《DDD死偉王ヘル・アーマゲドン》のカードをデッキの一番下に差し込んだ。インチキじみたサーチ効果を持つ《地獄門の契約書》でまた手札に戻つてくるかもしれないといえ、このプレイングは確実に無駄にはならないはずだ。

「墓地の闇属性モンスター《暗黒竜 コラップサー・ペント》を除外するこ

とで、手札から《輝白竜 ワイバースター》を特殊召喚。俺はこれで、ターンエンド……

未来 LP 40000 hand : 0

フィールド : 3 ☆8 《裁きの龍》 ATK / 3000

★8 《森羅の守神 アルセイ》 DEF / 3200
☆4 《輝白竜 ワイバースター》 DEF / 1800

0

魔法・罠 : 0

デュエルディスクのターン表示が零児に切り替わる。が、なかなか零児のターンが始まらない。どうしたものかと注目すると奴は、笑っていた。

「なぜ、今まで気付かなかつた……！ ペンデュラムも完成系ではない事に！」

「何の話だ」

「君にも見えたのではないか？ ペンデュラムの新たな進化の可能性が……私が今からそれを実証して見せよう！ 私の、タ――

「……なんですって？」

「マルコ先生が!?」

「?」

「零児さん！」

突如、デュエルに水が差された。赤馬理事長に耳打ちしているのは、LDSの中島さんだ。いつの間にそこにいたのだろう……？
「どうした、中島……」

『――』

「……」

通信が終わるや否や、零児は俺を通り過ぎ、神殿の階段を駆け下りていく。

「零児！ 何があつ――」

「この勝負、預ける」

「・・・っ！」

声をかけるが振り返りもしない。独りフィールドに取り残された
俺はひどく滑稽だった・・・